

館林キリスト教会 デボーションノート（2008年）

4月 1日 今日の通読箇所 ヘブル人への手紙 11章1～7
「信仰とは」

11章には「信仰とは」という書き出しで、信仰について、及び、信仰に生きた旧約聖書の人々について記されています。「信仰とは、望んでいる事からを確信し、まだ見ていない事実を確認することである」(1節)とあり、4節以降に人々の歩みが記されています。これらの人々について思い巡らすことは、大切に有益です。カインとアベルはアダムの息子たちです。弟のアベルは「信仰によって」供え物を捧げ、神様に受け入れられ義とされました。エノクは「信仰によって」神様に喜ばれる歩みを全うし、死を見ないようにして天に移されました。ノアは御告げを受け「信仰によって」箱舟を造りました。「信仰がなくては、神に喜ばれることはできない」(6節)。彼らは信仰のゆえに神様に喜ばれ、今もその信仰によって語り続けています。

4月 2日 今日の通読箇所 ヘブル人への手紙 11章8～16
「地上では旅人」

創世記12章には「時に主はアブラム(アブラハム)に言われた、『あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう』」とあります。彼はおことばに従い、行く先を知らずに出て行きました。約束の地で、彼は他国にいるような天幕生活をしました。やがて息子イサクが与えられ、お約束のように「大いなる国民」として、天の星のように増え広がりました。アブラハムたちは、約束のものを望み見て喜び地上では旅人、寄留者と告白していました。アブラハムはふるさとウルに帰ることもできましたが、彼が望み見ていたのは、神様が用意してくださったもっと良い天のふるさとでした。

4月 3日 今日の通読箇所 ヘブル人への手紙 11章17～22
「信仰による祝福」

ここにはアブラハムの試練とイサク、ヤコブ、ヨセフという信仰の父祖たちのことが記されています。アブラハムは忍耐の末にイサクを与えられ、彼を通して子孫に祝福が及ぶ約束を受けていました。しかし神は、そのイサクを献げるように命じました。アブラハムは、神の約束と神の命令の矛盾に苦しみました。しかし彼は信仰によって「神が死人の中から人をよみがえらせる力がある」(19

節)と信じ、神の命令に従ったのです。三人の父祖たちは、息子たちを祝福し語りました。それは民が、約束の地に入り、大いなる国民となるという神の約束が必ず成就するというものでした。彼らは、この約束をしっかり受け継ぎ、子孫に引き継いでいくことを自覚していたので、決して現状に絶望することなく、希望を抱きつつ死に臨んだのです。

4月 4日 今日の通読箇所 ヘブル人への手紙 11章23～32

「モーセ誕生の時」

当時、イスラエルの人々はエジプトで奴隷生活を余儀なくされていました。過酷な使役にもかかわらず、数が増し脅威を覚えたエジプト王は、イスラエル人に男の子が生まれたら殺せと命令し、それがうまくゆかないと今度は、ナイル川に捨てろと命じました。モーセはこの最悪と思われる時期に生まれたのです。両親アムラムとヨケベデは「信仰によって」三カ月の間家に隠しました。その後ナイルの茂みに置かれた幼子はエジプト王女に見出されました。モーセは幼児期に乳母としての実母に養育され信仰を育まれ、やがて王子として最高の教育を受けました。後にこれらが役立つこととなります。不思議な摂理です。

4月 5日 今日の通読箇所 ヘブル人への手紙 11章32～40

「信仰の勇者たち」

信仰によって生きた人々について細かく語るなら時間も紙面も足りません。名前は明記されていませんが多くの人が信仰を全うしました。「彼らは信仰によって」という内容はわかりやすいものもあります。神様の偉大な御力によりダニエルは「ししの口をふさぎ」シャデラクたちは「火の勢いを消し」、ギデオンを始めとする「弱いものは強くされ」、エリヤやエリシャによって息子たちをよみがえらされた母親たち。ほかの者は、更にまさったいのちのために信仰を全うし、迫害の時代を生きた人々の様子が記されています。これらの信仰の勇者たちもまた、天のふるさと、天の都を望み見つつ「信仰によって」歩みを全うしました。

4月 6日 今日の通読箇所 ヘブル人への手紙 12章1～6

「信仰の完成者イエス」

ヘブル人への手紙12章の初めの部分は、12章全体の要約であり、この手紙全体の最も素晴らしい箇所だと言われています。1節には「わたしたちの参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬこうではないか」と、クリスチャン生活を徒競走にたとえて記しています。競技場で走る者は、みな走りはするが、賞を得る者は一部の人という厳しい現実があります。けれども神様は、信仰生活にお

いては、「信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つ」
(2節)走り抜いたランナーに、すべて義の冠を授けてくださる(テモテ4:
8)という約束を与えておられるのです。しかも心強いことに、イエス様が責
任を持って終わりまで導いてくださるのです。

4月 7日 今日の通読箇所 ヘブル人への手紙 12章4～11

「愛の訓練」

著者は、クリスチャンの上に臨もうとしている厳しい信仰の試練を予想し、神
様が与える苦難の意味に対して3つの理由をあげて説明し、励ましているのだ
です。第一は、箴言3章11、12節の言葉を忘れてはならないということ。神
様の御手は、喜ばしい時だけでなく、困難な時、苦しい時にも信じる者に働い
ているということです。第二は、父は愛する子のために、自分を犠牲にしても、
子の成長と成熟を願うものです。だから、時に厳しく懲らしめを与えることも
あるのです。肉の父がそうならば、まして魂の父は、愛の訓練として、時に厳
しい苦難を与えることもあるのです。第三は、神様が与える苦難には必ず平安
な義の実を結ばせるという目的があるのです。それは果樹が実を結ぶのに、自
然の厳しさに耐えて実を結ぶのと似ています。

4月 8日 今日の通読箇所 ヘブル人への手紙 12章11～17

「手とひざをまっすぐに」

信仰生活において「わたしたちの参加すべき競走を、耐え忍んで走り抜こうで
はないか」(1節)という勧めに生きるために、12節には「それだから、あな
たがたのなえた手と、弱くなっているひざとを、まっすぐにしなさい」とあり
ます。走り抜くためには足腰が鍛えられてしっかりしていなければなりません。
み言葉に教えられ、祈り、鍛えられた信仰の歩みを重ねる日々でありたいと願
います。かけっこで転んでもすぐに立ち上がりゴールを目指すように。さらに
互いの平和、清さを求める生活。苦い根、すなわち、この世に心奪われ不信仰
に陥って、神様から離れないように。またエサウのように、霊的な祝福を軽ん
じてはならないと教えられています。

4月 9日 今日の通読箇所 ヘブル人への手紙 12章18～29

「天のエルサレム」

これは、十戒授与に先立つシナイ山での近づきがたい神様の御臨在の様子です。
しかし、キリストにある者が近づいているのは、シオンの山、すなわち、生き
ておられる神の都、天のエルサレム、祝会に集う無数の天使の群れ、天に登録
されている長子の教会(相続権は長子にあり、長子キリストのゆえに祝福を受

継ぐ者とさせていただきます)。キリストにあって義とされ時代を超えて天に集う人々。これらはキリストの贖いの恵みです。荒野のイスラエルのように御声を拒むことがないように。やがて新しい天と地が現れるのですから。焼きつくす火であられる神様の御臨在に耐え得ない罪人ですが、キリストのゆえに受け入れられ、天の都の市民とさせていただきますから、恐れかしこみつつ、神様に喜ばれるように日々仕えましょう。

4月10日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 13章1～6

「兄弟愛に生きる」

1～6節までには2つの勧めがあります。その1つは、「兄弟愛を続けなさい」という勧めです。2節には、その愛の広がりが自然と旅人にとどくように勧められています。さらに3節では、その愛の波紋は獄に繋がれている人たち、苦しめられている人たちにまで広がっていくようにという勧めです。4節以降は、このような兄弟愛に生きる者が、結婚生活から始まり、労働によって賃金を得、家族を養っていくという生活において間違いのないようにという戒めです。そこで金銭に執着してはいけない、貪欲であってはいけない、慎ましく生きることなどを勧めたのです。これらは当たり前の事かもしれませんが、兄弟愛に生きるとは、当たり前の事を主の前に誠実にを行うということなのです。

4月11日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 13章7～17

「神の言を語る指導者」

ヘブル13章の中には「指導者」という言葉が繰り返されています。17節にも24節にも出てきます。そして前後関係から見ると、現代の牧師の仕事をさしていると思います。「神の言」とは(7節) ルカによる福音書5章などを見ると、神様がイエス様を通して語られる言葉のことであることがわかります。そして7節の言葉は、原文では「あなたがたに語った、あなたがたの指導者たち」と書かれてあります。「あなたがた」が繰り返されているのは、よく知っている指導者のことだと思います。そして、こうした指導者のことをいつも思い起こすように、さらに彼らの生活の最後を見て、その信仰に倣うように勧めたのです。これらの勧めを読みますと、私たちに神の言を語り、その解き明かしをしてくださった小林牧師の事を思い出します。

4月12日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 13章18～25

「羊の大牧者」

今まで読み進めてきましたヘブル人への手紙も最後の交読になりました。難しい箇所が多かったですが、キリストの血による新しい契約の意味が何度も記さ

れていました。旧約時代から繰り返し捧げられてきた多くの動物の犠牲。礼拝のたびに流された動物の血。しかし、ただ一度十字架で捧げられたキリストのお体。流されたキリストの血潮により、彼を信じる者に罪の許しが与えられ、永遠の命が与えられること。キリストにあって、神の相続人としていただいたこと。やがて現れる天の都エルサレム。多くの信仰の証人たちのように、天のふるさとを目指して旅をします。その間、養い導いてくださる方は「永遠の契約の血による羊の大牧者、わたしたちの主イエス」さまです。(20節)

4月13日 今日に通読箇所 詩篇 第43篇1~5

「神の祭壇に行こう」

クリスチャンでも時には、神さまから離れたような、神さまから見捨てられたような、不信仰、疑惑、寂しさに襲われることがある。悔い改めない自分の罪に原因があることもある。困難な境遇のためかも知れない。しかし原因不明の時もある。詩人は言う「わが魂よなぜうなだれるのか。思い乱れるのか。わたしにはなお神の助けがある。さあ祈りつつ神を待ち望もう。やがて解放されて神を賛美する時がくる」と。信仰の自問自答、自分の魂の激励。本篇はそのまま前の詩篇の続きだ。

4月14日 今日に通読箇所 詩篇 第44篇1~26

「神の沈黙」

ここで詩人は、かつてはイスラエルを祝福し救いたもうた神が、今は沈黙してその苦難と敗北を見殺しにしているのを感じて苦しむ。悔い改めない自分の罪にその原因があることもある。しかし祈ってみても別に思い当たらない。それなのに祈りに手応えもなく依然神は沈黙している。ある人はこれを「霊的乾燥」という。祈りつつこういう苦しい場面を切り抜けるのも、信仰の大切な秘訣の一つだ。

4月15日 今日に通読箇所 詩篇 第45篇1~17

「王と王妃」

近日イギリスのチャールズ皇太子夫妻が来日されるそうだが、彼らはいま世界で最も人気のあるカップルの一組だろう。この詩篇に歌われているのは昔のイスラエル王とその妃の美と栄光である。とともに、やがて再臨の日に現れる、新郎なるキリスト、新婦なる教会の美と栄光の歌でもある。黙示録に「小羊の婚宴の時がきて花嫁はその用意をした」と書かれている、我々の希望と喜びの時である。

4月16日 今日の通読箇所 詩篇 第46篇1～11

「休息と礼拝」

[10節]「静まってわたしこそ神であることを知れ」を「余暇を確保せよ。そして礼拝に出席せよ」と訳した人がいる。過労でも病気にならないという人はいないし、また休まずに治る病気もない。ところが今は日本中が心身の過労に馴らされ、休みかたも知らない季節だ。ただもう一本調子で、人の言葉を聞いて「それもそうだ」と言えないし「あの手この手」の工夫もできないから自殺が流行る。家族とともに聖日の休息と礼拝を確保し、それを習慣づけることで、我々クリスチャンはその中から救われていると思います。

4月17日 今日の通読箇所 詩篇 第47篇1～10

「主は統べ治める」

わたしが若い時に指導をうけた舟喜先生は、戦争中、教団の委員長として苦労された。ある日のこと、外部の圧迫と教団内部の沈滞萎縮に追詰められて、何の打つ手もなくただ疲れ果てて、外から帰ってくると、書斎のテーブルの下に頭を突っ込んで、ただ悲しんでいた。しばらく祈りのあと、ふと「神はもろもろの国民を統べ治められる」というみことばが心にひらめいた。「その時、一切の困難と疲れ、敗北感は即座に消滅し、立ち上って神を賛美した」と話してくれた。わたしはこの話を今も忘れず、しばしば思い出します。

4月18日 今日の通読箇所 詩篇 第48篇1～14

「神の都」

イスラエル人にとってエルサレムは喜びと誇りの都で、その中に立つ神殿は、神の臨在と祝福のシンボルだった。国家と家庭の喜びの時、反対に戦争やききんの試みの時、人々は神殿に集って祈った。それはクリスチャンにとっての教会と似ている。「神よ、われらはあなたの宮のうちで、あなたのいつくしみを思いました」「そのやぐらを数え、その城壁に心を止め、そのもろもろの殿をしらべよ」などは、現在、教会を愛している大勢のクリスチャンの心そのもののよように思われる。

4月19日 今日の通読箇所 詩篇 第49篇1～20

「富のちから」

マルコス大統領の莫大な財産は、この頃新聞に書きたてられて世界を驚かせた。ここに詩人は言う。「富をもって人は魂をあがなうことはできない」「彼が生涯自分を幸福に感じて、また人から賞賛されても、やがて彼はまっすぐに墓に下る」「彼が死ぬとき、富も栄華も、何も携えてゆくことはない」。しかし救わ

れた者は「神はわたしの魂を受け、よみの力からあがない出される」と。

4月20日 今日の通読箇所 詩篇 第50篇1～15

「真の礼拝」

[7節～13節]に、いかにも豊かで立派だが真の礼拝に関係ないものが記してある。そして言う。「感謝のいけにえを神にささげよ。なやみの時に主を呼べ」これが真の礼拝であると。与えられている恵みのために、常に真実に神に感謝する。当面する困難や問題のために、あわてず絶望せず、信仰をもって神に助けを祈り求める。これこそ生活の中の生きた礼拝、神の求めたもう真の礼拝であると。

4月21日 今日の通読箇所 詩篇 第51篇1～19

「砕けた魂の詩篇」

神の祝福に溢れた、勇ましいダビナはりっぱだが、かくも謙遜真実に悔改めている彼の姿もまた美しい。中国の言葉に「君子の失敗は日蝕のごとし。欠けるや万民これを見る。回復するや万民これを仰ぐ」とあるが、アブラハムの場合もダビデの場合も本当にそうだ。有名なインド宣教師ウイリアム・ケアリーは、生前から「自分の葬式には、この1節2節から説教してくれ」と頼んでおいたそうだ。

4月22日 今日の通読箇所 詩篇 第52篇1～9

「裏切り者」

「落ちぶれて袖に涙のかかるとき、人の心の奥ぞ知らるる」という歌がある。ダビテは理由なくサウル王に追われ、エルサレムを亡命しなければならなかったとき、神殿に祭司を訪ねて祈りを求め、これからの身の振り方を相談した。ところがちょうどそこに居合わせた異邦人のドエグが、この様子をサウルに密告したので、これがサウル王の祭司の町虐殺事件にまで発展することになった。ここにダビデはこの裏切り者のために神の正義に訴えて、彼らの裁きを祈らざるを得ないのだ。

4月23日 今日の通読箇所 マルコによる福音書 1章1～13

「悔い改めと洗礼」

マルコによる福音書は「神の子イエス・キリストの福音のはじめ。」という言葉で始まっています。父なる神様が御子イエス・キリストをこの地上に送ってくださり、人間の救いを完成してくださった事実を書き記しています。第一章はバプテスマのヨハネが荒野に現れ、悔い改めのバプテスマを授けた記事から書き出されています。神様に対する真実な悔い改めの印としての洗礼でした。悔

い改めとは、罪を悔いるだけでなく、神様を信じて従う、という生き方の方向転換をすることです。バプテスマのヨハネの役割は人々にイエス様を信じる心備えをうながすためでした。

4月24日 今日に通読箇所 マルコによる福音書 1章14～20
「神の国は近づいた」

イエス様はカペナウムを拠点にしてガリラヤ湖周辺で宣教をなさいました。「神の国は近づいた」とは旧約聖書における神様の約束が成就するために、神様が定めておられた時がきた、ということです。「神の国は、実にあなたがたのただ中にあるのだ」(ルカ福音書 17章 21節)とイエス様はおっしゃいました。イエス様がおいでになったことによって、イエス様の教えとみわざにおいて神の国はすでに来たことと、イエス様が再臨なさる時この世の終わりに成就するという両面があります。悔い改めと信仰によって神の子、神の国の民としていただけるのです。

4月25日 今日に通読箇所 マルコによる福音書 1章23～34
「権威あるイエス様の教え」

ユダヤ人の会堂では、ラビ(先生の意味)の資格のあるいろいろな人々に、神様のお話をしてもらった。その中でもイエス様の教えは、特に力があつた。また、律法学者と言われる人々もいたが、言葉の説明や指図をするばかりで力がなかつた。イエス様のお話に不思議な力があつたのは、神の権威があつたからだ。ここには三つの奇跡が記されている。はじめは、汚れた霊を追放されたこと。現代も、悪霊との戦いが盛んだから、イエス様から目を離さないことが大事だ。次に、ペテロのしゅうとめを癒したこと。そして、夕方に多くの様々な病人をみな癒されたことである。いずれも神様の権威ある力と愛を感じる。

4月26日 今日に通読箇所 マルコによる福音書 1章35～45
「イエス様の使命」

イエス様は、夕方から詰めかけてきた病人や悪霊につかれた人々を、みな癒してあげた。その翌日には、夜が明ける前から祈りに専念されている。父なる神様との交わりなしに一日を始めることが出来ないからだ。朝、弟子達がイエス様を追ってきて、「人々があなたを探している」と言った。しかしイエス様は、その求めに応じず、「ほかの、附近の町々にみんなで行って、そこでも教えを宣べ伝えよう。わたしはこのために出てきたのだから」(38節)と仰せられた。イエス様には、みことばを宣べ伝え、人類の為に十字架にかかり救いのみわざを完成させる使命がはっきりしていたからだ。続いて、重い皮膚病の男の求めに

応じ、当時触れるのを禁じられていたにも係らず、彼にさわり「そうしてあげよう、きよくなれ」と言われ癒してあげた。

4月27日 今日に通読箇所 マルコによる福音書 2章1～12

「あなたの罪はゆるされた」

イエス様はガリラヤ湖周辺の町々で神様のみ言葉を大勢の人々に伝えていらっしゃいました。ご自分の町カペナウムに戻られた時、ある家でお話をしておられました。そこへ人々が四人の人に運ばせて一人の病気の人を連れてきました。群集のために近寄ることができないので、驚いたことに彼らは屋根をはぎ、病人を寝たままイエス様の目の前につり降ろしたのです。イエス様は彼らの信仰をご覧になって「人よ、あなたの罪はゆるされた」と宣言してくださいました。他の人の罪のゆるしを宣言できる人間はいません。なぜなら自分にも罪があるからです。罪のない、神のひとり子イエス様だけが、罪をゆるすことができになります。それがよくわかるように、病気をも癒してくださいました。

4月28日 今日に通読箇所 マルコによる福音書 2章13～22

「新しい皮袋に」

このヨハネとはバプテスマのヨハネです。断食をして悔い改め、あわれみを求める時代は過ぎ去り、長く待ち望まれた救い主イエス様がおいでになりました。イエス様を信じて罪ゆるされた喜びに生きる、という祝福がだれにでも与えられる時代がきたのです。これをイエス様は婚礼の喜びに例え、さらに二つの表現をなさいました。真新しい布ぎれを古い着物に縫い付けるなら、新しいつぎは古い着物を引き破りその破れはひどくなる。また、盛んに醗酵する新しいぶどう酒は古い皮袋をはり裂き、ぶどう酒も皮袋もむだにしてしまう、新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるべきだ、と。信仰によって罪を悔い改めイエス様を救い主として信じたなら、イエス様にふさわしく歩み始めるべきですと。

4月29日 今日に通読箇所 マルコによる福音書 2章23～3章6

「安息日論争」

イエス様と弟子たちは、安息日に麦畑を通りかかり、弟子たちが空腹のため、穂を摘んで食べた。パリサイ人がそれをとがめたことから安息日をめぐり論争が始まった。この論争は三つの段階を経ている。第一は、パリサイ人の批判で、安息日にはしてはならないことが問題にされている。第二は、イエス様の答えから、安息日は何のためにあるのかを問題にしている。第三は、安息日はだれのためにあるかを明確にしている。28節の「人の子は、安息日にもまた主なのである」と言って、御自身がメシヤであると宣言したのはよく知られている。

イエス様は、3章の初めの部分で、安息日が積極的に善を行う日である事を説いた。またイエス様を罾に陥れようとして引き出した片手のなえた人を癒し、安息日が善を行うためである事の模範を示した。

4月30日 今日に通読箇所 マルコによる福音書 3章7～19

「12人の弟子たちの選出」

イエス様は、パリサイ人たちやヘロデ党の者たちがイエス様を殺そうと相談しはじめたことに気づかれた時、ガリラヤ湖のほとりへ逃れました。しかしそこにも大勢の病人や汚れた霊を持った人々が押し寄せて来たので、その人々を癒してあげました。それからイエス様は山に登られ、祈りのうちに12人の弟子たちを選ばれました。イエス様は弟子たちに「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」(マルコ 16:15)と命じました。その弟子たちとは、無学なただの人たち(使徒 4:13)、取税人、雷の子(気短な者)、裏切り者たちでした(マルコ 3:16～19)。主は、そのような者たちをあえて選ばれたのです。同様に私たちも、小さな取るに足りない者であっても、主の働きに参加できる幸いを覚え感謝していきましょう。